

イタリア語における2人称単数

“否定命令”表現の史的考察

古 浦 敏 生

序

Battaglia, S. & Pernicone, V. の現代イタリア語文法によれば, " Nell'imperativo negativo, ^(注1)
una forma particolare ha la seconda persona singolare del presente, che corrisponde
alla forma dell'infinito presente preceduta dalla negazione non : 'non mangiare',
 'non correre', 'non leggere', ecc. 「否定命令法において, 2人称単数現在形は, 否定詞 non
 に先行された不定法現在形という特殊な形態を取る。例えば, 『汝は食べるな』, 『汝は走るな』, 『汝
 は読むな』, 等。(棒線筆者) 」" とある。では一体, この特殊な形態(即ち, 命令法の代りをする不定
 法)はいつの時代から現れ, 勢力を得たのか? このことに関しては, 後に引用する若干の書物を除き,
 Battaglia, S. & Pernicone, V. を代表とする現代イタリア語文法書も, Migliorini, B. や Rohlfs, G. ^(注2) ^(注3) ^(注4)
 のイタリア語史も, Wiese, B. の古代イタリア語文法も何ら触れていない。
^(注5)

そこで, 本稿では, ダンテ「神曲」と Duecento イタリア語(1225 ~ 1300)の資料を中心に, 2人称
 単数否定命令表現(即ち, 禁止表現)の数量的な調査を基にして, 他のロマンス語とも比較しつつ, 古典
 ラテン語(B. C. 200 ~ A. D. 200)から現代イタリア語までの言語変遷を略述することを目的とする。ま
 ず, イタリア語史研究の起点とも言うべき古典ラテン語における用法(第1節参照)と現代イタリア語に
 おける用法(第2節参照)を記述し, その後, 両者の中間段階としてのダンテ「神曲」(第4節参照)と
 Duecento イタリア語(第5節参照)の記述に移ることとする。

1

古典ラテン語(Classical Latin)における否定命令表現は, 韻文と散文とではその用法が異っていた。
 例えば, ウェルギリウス(B. C. 70 ~ B. C. 19)の叙事詩「アエネーイス」第6巻465行: teque aspe-
 ctu ne subtrahe nostro 「汝は我々の視界から姿を消すな」に対する Gould, H. E. & Whiteley, J. E.
 の注には, " Negative commands may be expressed in prose either by noli (nolite) + in-
^(注6)
 finitive, or by ne + perf. subjunctive. ne + imperative, common in Vergil, is poetic.
^(注7)
 「否定命令は, 散文ならば『noli (nolite) + 不定法』または『ne + 完了接続法』によって示されたで
 あろう。ウェルギリウスのよく用いる『ne + 命令法』は韻文におけるものである 」" とある。従って,

このne subtrahe は、散文ならば noli subtrahere 或は ne subtraxeris として現れていたであろうことになる。また、散文では「cave (cavere『用心する』の命令法現在2人称単数形) + 接続法」の形式も現れる。

第 1 表

ところで、「アエネーイス」(全12巻)に関する筆者の調査によれば、「ne + 接続法」の形式もわずかながら現れる。その使用頻度を表示したのが第1表である。つまり、2人称単数においては「ne + 命令法」の形式が21例、^(注8)それに対して「ne + 接続法」の形式が1例現れている。^(注9)(なお、2人称単数以外のものも参考までに数値を示しておいた。また、1人称単数の所が斜線になっているのは、命令の形式が存在しないからである。)

数	人称	ne + 命令法	ne + 接続法
単数	1		
	2	21	1
	3	1	1
複数	1	0	0
	2	8	0
	3	0	1
計		30	3

2

次に、現代イタリア語における否定命令表現の活用 (cantare「歌う」)を示したのが第2表である。1人称単数に命令形が存在しないのはラテン語の場合と同様であるが、2人称単数は上述の如く「non + 不定法」の形式である。3人称単数・複数は「non + 接続法現在形」に由来するものである。1人称・2人称複数は「non + 直説法現在形」と同一形式のものである。要するに現代イタリア語においては、肯定命令表現に否定詞 non を付せば否定命令表現が得られるが、2人称単数に限り「non + 不定法」という特殊な形式が用いられているということになる。

第 2 表

数	人称	否 定 命 令 形
単数	1	
	2	non cantare
	3	non canti
複数	1	non cantiamo
	2	non cantate
	3	non cantino

ここで、ロマンス諸語全般に亘る否定命令表現をまとめておこう。Tekavčić, P. は「否定命令表現の形式を基準にすると、ロマンス諸語は次の3つのグループに分けられる」としている。^(注10)

- (1) 命令法に否定詞を付す方法を用いている言語グループ。即ち、現代フランス語。
 例えば、Chante! 「汝は歌え」: Ne chante pas! 「汝は歌うな」, Prends! 「汝は取れ」: Ne prends pas! 「汝は取るな」。
- (2) 接続法に否定詞を付す方法を用いている言語グループ。即ち、スペイン語、ポルトガル語。例えば、^(注11)
 sp. ¡No cantes! 「汝は歌うな」, ¡No vendas! 「汝は売るな」; port. Não cantes! 「汝は歌うな」, Não vendas! 「汝は売るな」。要するに、イベロ・ロマンス語では、肯定命令表現と否定命令表現との対立は、単に否定詞の有無のみならず、動詞の形態 (命令法: 接続法) においても存在するのである。
- (3) 2人称単数において不定法に否定詞を付す方法を用いている言語グループ。即ち、イタリア語、ル^(注12)

ーマニア語、古代フランス語。例えば、rom. Nu cînta! 「汝は歌うな」、franc. ant. Ne dire!
(注13) (注14)
「汝は語るな」。

これによれば、Battaglia, S. & Pernicone, V. の言う「特殊な形態」を用いる言語はイタリア語だ
(注1)
けではないことが分る。

3

さて、古典ラテン語には存在しなかった「non + 不定法」の形式が、如何にして前節の第3グループのロマンス語(即ち、イタリア語、ルーマニア語、古代フランス語)に現れたのであろうか?この点に関しては未だに諸説紛々であって、この問題の解決は本稿のねらいとする所ではないが、ここでは参考までに3つの有力な説を述べておく。

(注15)

(1) 音変化にその原因を求める説。これは、古典ラテン語において最も数が多く且つ生産的(produ-ttivo)であった -are, -ire 動詞の接続法完了形が音変化を起し、不定法と同形となったとする説である。例えば、lat. portaverim, portaveris, portaverit (portare 「運ぶ」の接続法完了1・2・3人称単数形)は、語中音 -ve- の消失後、語尾 -im, -is, -it の語末子音消失、さらに、語尾母音 i が e に変化して portare となった。そして、否定詞 non が従来の否定詞 ne に取って代り、non portare 「汝は運ぶな」という形式が出来上ったとするものである。

(2) 古典ラテン語の2人称単数否定命令構文「noli + 不定法」における noli の代りに、否定詞 non が用いられるようになったとする説。例えば、noli cantare 「汝は歌う(ことを欲する)な」が non cantare となったとするものである。

(3) 文体論的・社会言語学的(stilistico-sociolinguistico)要因に依るとする説。既に俗ラテン語(Vulgar Latin)の資料(A. D. 4世紀の作とされる獣医術概説書 Mulomedicina Chironis「キロの家畜治療法」)において、否定命令に用いられる不定法の例が見られる。この文体・用法をその
(注16)
ままロマンス語の段階で採用したとするものである。この文体は、主語が記されない(つまり、あたかも主語は示すに値しないものとして考えられた)ので、きびしいぶっきらぼうな印象を与えるものであった。従って、これは、親しい(或は、尊敬の念をあまり必要としない)間柄を示す2人称単数において採用されたとするものである。

ここで、(3)の説と関連して若干補足しておきたい。国原吉之助氏は、中世ラテン語(Medieval Latin)
(注17)
(A. D. 550~1300)において「ne + 不定法」の形式が現れることを指摘しておられる。この形式における否定詞 ne が non に取って代られ、ロマンス語へと引き継がれた可能性も十分考えられる。

4

古典ラテン語からイタリア語への言語変遷を考える際、一つの大きな節とせねばならないのがダンテ・アリギエーリ(1265~1321)の「神曲」である。

まず、ダンテ百科事典によれば、" Normalmente l'imperativo negativo di II singolare prende la forma dell'infinitivo : Caron, non ti crucciare (Inf. III, 94), Non attender la forma del martire (Purg. X, 109), Se io mi trascoloro, non ti maravigliar (Par. XXVII, 20). Ma si ha pure qualche esempio di congiuntivo esortativo : non abbie dottanza (Fiore, XI, 12), e un paio della forma imperativa : non ti ricredi (Rime, LXIII, 6), Tu non temi aver vergogna di me (Fiore, CCVI, 6)。「2人称単数の否定命令は、普通、不定法の形態を取る。例えば、『カロンよ、汝は立腹するな』(Inf. III, 94),『汝は苦しみの形式に着目するな』(Purg. X, 109),『たとえ私が色を変えたとしても、汝は驚くな』(Par. XXVII, 20)。しかし、勧告を表わす接続法の用例も若干現れる。例えば、『汝は疑惑を持つな』(Fiore, XI, 12)。また、命令法の形も2例現れる。即ち、『汝は考えを改めるな』(Rime, LXIII, 6),『汝は私に対して恥ずかしいと思つてはならぬ』(Fiore, CCXI, 6)」とある。そして、ダンテ百科事典は、「神曲」における「non + 不定法」の形式39例を挙げている。但し、筆者の調査によれば、「non + 不定法」の形式は45例である。また、「non + 接続法」の形式も2例見つかった。以下、「神曲」における2人称単数否定命令表現のリストを明示しておこう。(なお、ダンテ百科事典に記載されているものには◎印を、行末において現れたものには●印を付しておく)

(1) 「non + 不定法」の形式

◎● non ti crucciare 「汝は立腹するな」(Inf. III, 94), ● non dimandare 「汝は説明を求めるな」(Inf. III, 96), ◎ non impedir 「汝は妨げるな」(Inf. V, 22), ● non dimandare 「汝は質問するな」(Inf. V, 24), ◎ non mi lasciar 「汝は私を見捨てるな」(Inf. VIII, 100), ◎ non temer 「汝は恐れるな」(Inf. VIII, 104), ◎ non sbigottir 「汝は驚くな」(Inf. VIII, 122), ◎ non perder l'ora 「汝は時を失うな」(Inf. XIII, 80), ◎ non far sopra la pegola soperchio 「汝は瀝青の上へ顔を出すな」(Inf. XXI, 51), ◎ non temer tu 「汝は恐れるな」(Inf. XXI, 62), ◎ dir chi tu sei non avere in dispregio 「汝は身分を明かすことを軽蔑するな」(Inf. XXIII, 93), ◎ non essere duro 「汝は頑固であるなかれ」(Inf. XXVII, 56), ◎ non portar 「汝は(彼を)連れて行くな」(Inf. XXVII, 114), non mi far torto 「汝は私に対して不正行為をするな」(Inf. XXVII, 114), ◎ non ci far ire a Tizio né a Tifo 「汝はティツィオやティーフォの所へ我々を行かせるな」(Inf. XXXI, 124), ◎ non torcer lo grifo 「汝はしかめつらをするな」(Inf. XXXI, 126), ◎ non mi dar più lagna 「汝はこれ以上私に悩みを与えるな」(Inf. XXXII, 95), ◎ non tacer 「汝は黙っているとはならぬ」(Inf. XXXII, 113), nol dimandar, lettore 「読者よ、汝はそのことを訊ねるな」(Inf. XXXIV, 23); ◎ non ti maravigliar 「汝は驚くな」(Purg. III, 29), ◎ non ti fermar 「汝は留まるな」(Purg. VI, 44), ◎ non aver tema 「汝は恐怖を持つな」(Purg. IX, 46), ◎ non stringer 「汝は締め付けるな」

(Purg. IX, 48), ◎ non ti maravigliar 「汝は驚くな」(Purg. IX, 72), ◎ non tener
pur ad un loco la mente 「汝は一箇所だけに注意を集中するな」(Purg. X, 46), ◎ non
attendere la forma del martire 「汝は苦しみの形式に着目するな」(Purg. X, 109), ◎ non
guardar lo nostro merto 「汝は我々の徳を見つめるな」(Purg. XI, 18), ◎ non sperme-
ntar 「汝は試してみるな」(Purg. XI, 20), ◎ non ti maravigliar 「汝は驚くな」(Purg.
XIV, 103), ◎ non ti maravigliar 「汝は驚くな」(Purg. XV, 28), ◎ non mi celar 「汝
は私に隠すな」(Purg. XVI, 43), non errar 「汝は間違えるな」(Purg. XIX, 134), ◎ non
dubbiar 「汝は恐れるな」(Purg. XX, 135), ◎ non aver paura di parlar 「汝は話すこと
に対する恐怖を持つな」(Purg. XXI, 118-119), ◎ non far 「汝は(そのようなことを)する
な」(Purg. XXI, 132), ◎ non contendere all'asciutta scabbia 「汝は干からびた瘡蓋に注
目するな」(Purg. XXIII, 49), ◎ non rimaner 「汝は遠慮するな」(Purg. XXIII, 54),
◎ non mi far dir 「汝は私に話をさせるな」(Purg. XXIII, 59), non aspettar mio dir
「汝は私の言葉を待つな」(Purg. XXVII, 139), ◎ non pianger anco 「汝はまだ泣いてはな
らぬ」(Purg. XXX, 56), ◎ non pianger ancora 「汝はまだ泣いてはならぬ」(Purg. XXX,
56); ◎ non ti maravigliar 「汝は驚くな」(Par. III, 25), ◎ non ti maravigliar 「汝
は驚くな」(Par. V, 4), ◎ non ti maravigliar 「汝は驚くな」(Par. XXVII, 20), ◎ non
asconder 「汝は隠すな」(Par. XXVII, 66)

(2) 「non + 接続法」の形式

non t'inganni 「汝は間違うなかれ」(Inf. V, 20), ● non ti dispiaccia 「汝は失望する
な」(Inf. XV, 31)

ここで注意せねばならないのは、●印の付いた用例の処理である。^{ぎょうまつ}行末では押韻のために形態が歪めら
れる可能性もあるので、これらの用例は計算からはずす必要があろう。さらに、「神曲」においては「non
+ 命令法」の形式が1例も現れなかった点にも注目すべきであろう。以上の結果をまとめたのが第3表で
ある。(●印の用例は計算に入れていない)

この表によれば、「non + 不定法」:

第 3 表

「non + 接続法」の比率は42:1で、圧倒的に「non + 不定法」の形式が優勢で
ある。従って、「神曲」の執筆開始時点
(1300年頃とされている)において既に、
「non + 不定法」(つまり、現代イタリア語の用法)はほぼ固定していたと考え
られる。

形式 神曲	non + 不定法	non + 接続法	non + 命令法
Inf.	16	1	0
Purg.	22	0	0
Par.	4	0	0
計	42	1	0

ここで、「神曲」よりもやや時代の古いDuecento イタリア語(1225～1300)における2人称単数否定命令表現について調べてみよう。資料としては、散文のNovellino「古譚百種」(作者不詳)と韻文Tesoretto「小宝庫」《Brunetto Latini(1220～1294)作の教訓文学》とを用いることにする。以下、^(注19)それぞれの用例とその箇所を列記しておく。

- (1) Novellino について(いずれも「non+不定法」)。non mi rispondere「汝は私に返事をするな」(III), non mi donare cittade「汝は私に町を与えるな」(IV), non dannare「汝は(その数字を)消すな」(XXV), non venire in mia forza「汝は私の支配下に入るな」(XXX), non mi battere「汝は私を打つな」(XXXVI), non ti scusare「汝は逃れるな」(LXXI), non ti ramaricare「汝は嘆くな」(LXXII), non temere「汝は恐れるな」
- (2) Tesoretto について《なお、行末において現れたものには●印を付しておく。()内の数字は行数を示す》

(イ) 「non+不定法」の形式

non dire「汝は語るな」(1440), non dicer「汝は語るな」(1445), ● non ubliare「汝は忘れるな」(1505), non fare un laido piglio「汝は気難しい顔をするな」(1557), non chiamare「汝は呼ぶな」(1558), non usar rampogna nè dire altrui vergogna「汝は(他人を)叱責するな、また、他人を侮辱するようなことを言うな」(1627－1628), non prender grosso core「汝は腹を立てるな」(1647), non ti smagar di loco「汝はその場から引き下がるな」(1690), non prendere vantaggio「汝は優越感を味わうな」(1692), ● no llo sforzare「汝は彼を無理強いするな」(1697), non dir novella「汝は何も語るな」(1757), no 'nde pigliare aempio「汝はそれを手本にするな」(1784), non render più onore「汝は必要以上に敬意を表すな」(1798), non guardar l'altezza「汝は高所を眺めるな」(1812), non guizzar com'anguilla「汝は鰻のように跳ねるな」(1816), non fare adimoranza「汝は遅れるな」(1820), nol far tanto penare「汝は彼をひどく待たせるな」(1822), tu non usar bugia「汝は嘘をつくな」(1880), no llo lasciar perire「汝はそれ(汝の町)を滅びるがままにするな」(1944), non bassar tuo onore「汝は己の名誉を汚すな」(2020), non dubiar dela morte「汝は死を恐れるな」(2034), non mostrar pavento「汝は恐怖を示すな」(2048), ● non ce t'assicurare「汝はそのことに関して安心してはならぬ」(2074), no llo tener a vile「汝は彼を軽蔑するな」(2076), no lli mostrare asprezza「汝は彼にきびしい態度を取るな」(2089), non rizzar lo tuo petto「汝は胸を(怒りで)一杯にするな」(2108), non aver tal fretta「汝はそのように性急になるな」(2126), non menar tal burbanza「汝はそのような傲慢さを示すな」(2139), non dubitar di morte「汝は死を恐れるな」(2162), ● più non mi toccare「汝はもはや私の

所へやって来るな」(2245)

(四) 「non + 接続法」の形式

non abie in ciò vilezza「汝はそのことに関して卑劣になるな」(1441), non sia troppo parlante「汝は口が軽すぎてはいけない」(1603), non sia inizzatore, nè sia redicatore「汝は告げ口をしてはならない, また, 他人の話の受け売りも禁物である」(1623-1624), non sie sì sicuro「汝はそうのように横柄であってはならぬ」(1633), non falli amore「汝は(相手の)友情を失うな」(1648), di gir non sie più oso「汝はもはや敢えて行くな」(1668), non ti caglia d'usare「汝は(他人の)行為を気にかけるな」(1673), ● non ti caglia「汝は気にかけるな」(1778), non sia 'n sì grave stallo「汝はそれほどひどい状況下に在ってはならぬ」(1959), non sie più corrente「汝は必要以上に寛大になるな」(2109), ● non ti caglia「汝は気にかけるな」(2143), non sie trovatore di guerra「汝は戦争の首唱者であってはならぬ」(2145-2146), non sie lento「汝はのろろするな」(2157), non sia lanier「汝はきびしすぎてはいけない」(2169)

以上, (1)(2)の結果をまとめたのが第4表である。(●印の付いた用例は第4節で述べたと同じ理由により計算に入れていない)

第 4 表

この表によれば, 「non + 不定法」

: 「non + 接続法」の比率は, 散文 Novellino では 8 : 0, 韻文 Tesoretto では 27 : 13 (約 2 : 1) となっている。従って, 散文では既に「non + 不定法」の形式が固まって

作品 \ 形式	non + 不定法	non + 接続法	non + 命立法
Novellino	8	0	0
Tesoretto	27	13	0
計	35	13	0

いるが, 韻文では未だ古い形式が残存していることが分る。

ここで, Tesoretto における「non + 接続法」の形式 13 例のうち 10 例までが *essere* である点にも注目せねばなるまい。これは *essere* が「non + 不定法」の形式を嫌い, 強い抵抗を示したからではあるまいか? (尤も, 「神曲」では *non sia* の用例は見られず, *non essere* の用例が 1 つだけ現れている。)(注20) (注21) このことについては Duecento イタリア語の他の資料による検証が必要であろう。

結 語

ここで, これまでに 2 人称単数否定命令表現に関して明らかにされた事実《このうち(4)(5)(7)は筆者の今回の調査によるものである。》を時代順に列記しておく。

- (1) 古典ラテン語において, 散文では「*noli* + 不定法」または「*ne* + 接続法」または「*cave* + 接続法」の形式が, 韻文では「*ne* + 命立法」または「*ne* + 接続法」の形式が現れる。(第1節参照)
- (2) A. D. 4 世紀の俗ラテン語の資料では「non + 不定法」の形式も現れる。(第3節参照)

- (3) 中世ラテン語 (A. D. 550 ~ 1300) では「ne + 不定法」の形式も現れる。(第3節参照)
- (4) Duecento イタリア語の散文 Novellino では、8例ともすべて「non + 不定法」の形式が現れる。
(第5節参照)
- (5) Duecento イタリア語の韻文 Tesoretto では、「non + 不定法」と「non + 接続法」の2つの形式が現れる。そして、両者の使用頻度の比率は 27 : 13 (約 2 : 1) である。(第5節参照)
- (6) ダンテの韻文 Fiore, Rime (これらは「神曲」より以前の作品) では、「non + 接続法」や「non + 命令法」の形式もまれに現れる。(第4節参照)
- (7) ダンテ「神曲」では、「non + 不定法」と「non + 接続法」の2つの形式が現れる。そして、両者の使用頻度の比率は 42 : 1 である。(第4節参照)
- (8) 現代イタリア語では、専ら「non + 不定法」の形式が現れる。(第2節参照)

最後に、以上の事実を踏まえて、2人称単数否定命令表現の古典ラテン語から現代イタリア語への変遷を追ってみよう。

A. D. 4世紀の俗ラテン語において「non + 不定法」という新しい表現形式が出来上った際 (eg. non dare 「キロの家畜治療法」139), 古典ラテン語 (B. C. 200 ~ A. D. 200) において既に不定法 (つまり, noli + 不定法) を採用していた散文では、すぐにこれを取り入れ、Duecento イタリア語の時代 (1225 ~ 1300) には「non + 不定法」の形式が確固たる勢力を得た。他方、古典ラテン語の時代には「ne + 命令法」と「ne + 接続法」の形式を用いていた韻文では、散文におけるほどスムーズには「non + 不定法」の形式は受け入れられなかった。その証拠に、Duecento イタリア語の時代には、2人称単数否定命令表現の約 1/3 は「non + 接続法」の形式であった。しかし、この韻文においても、ダンテ「神曲」の時代 (1300年頃執筆開始) には、圧倒的に「non + 不定法」の新興勢力が優位を占めるに至った。そして、この「non + 不定法」の形式は、現代イタリア語においては、揺るぎなき地位を確保したのである。尤も、Regula, M. & Jernej, J. (注22) や Fornaciari, R. (注23) によれば、「non + 接続法」と「non + 命令法」の形式も完全に消え去った訳ではなく、Alfieri, V. (1749 ~ 1803) や Niccolini, G. (1782 ~ 1861) や Parini, G. (1729 ~ 1799) の韻文ではまれにはあるが用いられているとされている。

注

(注1) Battaglia, S. & Pernicone, V. : La grammatica italiana, 1957, Torino, p. 375

(注2) Ceppellini, V. : Dizionario grammaticale per il buon uso della lingua italiana, 1962, Novara ; Fogarasi, M. : Grammatica italiana del Novecento, 1969, Budapest ; Gabrielli, A. : Dizionario linguistico moderno, 1961, Milano ; Goidànich, P. G. : Grammatica italiana, 1967, Bologna ; Piazza, E. : Grammatica italiana, Vol. I, II, 1933-1938, Livorno ; Tinto, E. : Grammatica scienza esatta, 1959, Roma

- (注3) Migliorini, B. : *Storia della lingua italiana*, 1961, Firenze
- (注4) Rohlfs, G. : *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, vol. I, II, III, 1966—1969, Torino
- (注5) Wiese, B. : *Altitalienisches Elementarbuch*, 1928, Heidelberg
- (注6) Gould, H. E. & Whiteley, J. E. : *Aeneid, Book VI*, 1969, Macmillan (Modern School Classics) p.93
- (注7) 「noli + 不定法」は2人称単数に, 「nolite + 不定法」は2人称複数に用いられる。なお, noli は nolle 「欲する」の命令法現在2人称単数形, nolite はその2人称複数形である。
- (注8) ne---time (II, 606—607), ne linque (III, 160), ne dubita (III, 316), ne finge (IV, 338), ne---manda (VI, 74), ne cede (VI, 95), ne defice (VI, 196), ne subtrahe (VI, 465), ne saevi (VI, 544), ne quaere (VI, 614), ne subtrahe (VI, 698), ne quaere (VI, 868), ne pete (VII, 96), ne temne (VII, 236), ne--finge (VII, 438), ne---quaere (VIII, 532), ne desere (X, 600), ne desere (X, 649), ne cessa (XI, 401), ne---prosequere (XII, 72—73), ne tende (XII, 938)
- (注9) ne---dubites (VIII, 613—614)
- (注10) Tekavčić, P. : *Grammatica storica dell'italiano*, vol. II (Morfosintassi), 1972, Bologna, p. 418
- (注11) Lausberg, H. : *Linguistica romanza*, traduzione dal tedesco di N. Pasero, vol. II, *Morfologia*, 1971, Milano, p. 194 によれば, カタラン語もこのグループに属する。
- (注12) Lausberg, H. : op. cit., p. 194 によれば, レトロマン語エンガディン方言, 古代プロヴァンス語もこのグループに属する。
- (注13) 直野敦「ルーマニア語文法入門」昭和42年, 大学書林, p.74
- (注14) Brunot, F. & Brunot, C. : *Précis de grammaire historique de la langue française*, 1949, Paris, p.369
- (注15) Tekavčić, P. : op. cit., vol. II, pp.418—420
- (注16) Tekavčić, P. は用例の箇所を明示していないが, 「キロの家畜治療法」の第139節に *autem simpliciter non dare* 「しかし, 汝は単純には(即ち, 生のままでは)与えてはならぬ」とある。《Niedermann, M. : *Proben aus der sogenannten Mulomedicina Chironis*, 1910, Heidelberg, p.20 (Sammlung vulgärlateinischer Texte)》
- (注17) 国原吉之助「中世ラテン語入門」昭和50年, 南江堂, pp.97—98
- (注18) Istituto della Enciclopedia Italiana fondata da G. Treccani : *Enciclopedia Dantesca*, Appendice (Biografia, Lingua e Stile Opere), 1978, Roma, pp.266—267

- (注19) 「小宝庫」の邦訳としては、拙稿「Duecento イタリア語における前置詞の用法 —— 出発点『～から』の意を表わす da と di について ——」(広島大学文学部紀要, 第 38 巻, 1978)における注 p.p.428 - 433。拙稿「Duecento イタリア語研究 —— 『テゾレット』を中心として(その 1) ——」(広島大学文学部紀要, 第 39 巻, 1979)。拙稿「Duecento イタリア語研究 —— 『テゾレット』を中心として(その 2) ——」(広島大学文学部紀要, 第 40 巻, 1980)を参照されたい。
- (注20) sia, sie はともに essere の接続法現在 2 人称単数形である。
- (注21) (Inf. XXVII, 56)
- (注22) Regula, M. & Jernej, J. : Grammatica italiana descrittiva su basi storiche e psicologiche, 1965, Bern, p.209. その用例として, Del re non temi (= non temere) !
「汝は王様を恐れるな」(Alfieri)
- (注23) Fornaciari, R. : Sintassi italiana, presentazione di G. Nencioni, 1974, Firenze, p.184